

2020年度 傾斜的研究費（全学分）
社会連携支援（都連携研究支援・社会連携活動支援） 研究報告書

【研究費区分】：社会連携活動支援（出版）

【研究代表者所属】：東京都立大学 人文社会学部 人間社会学科

【研究代表者氏名】：左古 輝人

【研究代表者氏名フリガナ】：サコ テルヒト

【研究代表者職】：教授

【研究分担者（所属,氏名,職）】

神戸大学 橋本直人 准教授

東北学院大学 鈴木努 准教授

筑波大学 樋熊亜衣 助教

日本学術振興会（東京大学） 前田一步 特別研究員

東京都立大学 河野静香 博士後期課程

【研究課題名】：テキスト計量の最前線 データ時代の社会知を拓く

【研究実績の概要】

計算機の創造的な利用を目的とする研究会「ソーシャルコンピューテーション研究会」（2014年～現在）の代表的な研究成果のうち、計読（テキストマイニング、計量テキスト分析、テキストアナリティクス）を知識社会学研究、学説研究、社会問題研究などに適用したモノグラフを集成した図書『テキスト計量の最前線 データ時代の社会知を拓く』（総166ページ）をひつじ書房より2021年3月刊行した。2021年1月から3月にかけて、相次いで刊行された鳥海不二夫編『計算社会科学入門』（丸善2021年1月）、小峯敦編『テキストマイニングから読み解く経済学史』（ナカニシヤ出版、2021年2月）と並んで、今後の関連諸研究において必ず「古典」として参照されることとなる成果である。

【研究成果の都民への還元あるいは東京都への政策提言】

・ 図書『テキスト計量の最前線 データ時代の社会知を拓く』（総166ページ）をひつじ書房より2021年3月刊行した。目次は以下のとおり。

序 左古 輝人

1. 計読の提案
2. オープンソースの形態素解析器と計読ソフトウェアの展開
3. 計読私譚—1990年代半ば
4. 計読私譚—1990年代終わり
5. 計読にかかわる素朴な疑問—2000年代以降
6. 計読コミュニティの形成—2010年代
7. 計読の近未来

新自由主義の探究—日英の比較から— 左古 輝人

1. はじめに—新自由主義の迷路 2. 近代世界の重要アンブレラ・ターム—国家、社会、資本制 3. 20世紀の4つの新自由主義 3.1 戦前日本新自由主義 3.2 戦後ドイツ新自由主義 3.3 反ケインズ新自由主義 3.4 ホブソン新自由主義 4. 図書と逐刊の題目による全体の概観 4.1 21世紀新自由主義の理念型 4.2 1910年代から2010年代までをおしなべた日英比較 4.3 1910年代から2010年代までの、経時的な日英比較 5. 各時期における諸特徴の掘り下げ 5.1 英語における統治対象の変化—ラテン・アメリカから地球へ 5.2 日本における新自由主義政策の焦点化—労働と教育 5.3 ハーヴェイとフーコー 6. まとめと展望

マックス・ウェーバーにおける「暴力 Gewalt」概念 —「権力 Macht」「支配 Herrschaft」との対比から— 橋本 直人

1. 本章の目的と背景 2. 分析の対象とすすめ方 3. 分析の実行 3.1 テキストの確定 3.2 《Gewalt》の比較対象としての《Macht》《Herrschaft》の妥当性 3.3 《Gewalt》《Macht》《Herrschaft》3語群の比較—共起ネットワークにおける《Herrschaft》と《Gewalt》《Macht》との差異 3.4 《Gewalt》と《Macht》との比較—共起78語群との出現頻度の相関における差異 4. 計量分析を踏まえたウェーバー解釈とその射程

新聞記事にみる近代東京・都市公園の話題変遷 — 長期・記事見出しデータへのトピックモデルの適用 — 前田 一步

1. はじめに 1.1 都市公園の利用・受容という研究対象 1.2 本章の分析対象 1.3 本章の構成 2. 研究方法 2.1 分析に使用するデータセット 2.2 トピックモデルの方法と意義 3. 分析結果—都市公園のトピック 3.1 上野公園のトピック 3.2 日比谷公園のトピック 4. トピックの変遷—変わったこと、変わらないこと 4.1 啓蒙から社会教育・行楽の場へ、「猥雑さ」の縮小 4.2 国威発揚から社会運動の場へ 4.3 都市公園利用者としての子どもの登場 5. おわりに

近代日本社会における Self-Starvation の歴史 —摂食障害の形成以前を中心に— 河野 静香

1. はじめに 2. SS事例の抽出 2.1 資料の選定 2.2 分析手法と手順 2.3 初歩的な分析と仮説の導出 3. 第1期におけるSS記事本文の内容分析 3.1 宗教の文脈でのSS事例 3.2 政治の文脈でのSS事例 3.3 医療の文脈でのSS事例 3.4 精神病や狐憑病とされるSS事例の登場 3.5 自殺の文脈でのSS事例 3.6 美容・健康の文脈でのSS事例 3.7 その他のSS事例 4. 第2期と第3期の概要 4.1 第2期 [医療、教育、フェミニズム] 4.2 第3期 [医療、依存、福祉] 5. おわりに

婦人運動とウーマン・リブとの架橋 —「日本婦人問題懇話会」の会報にみるリブへの共感と距離感— 樋熊 亜衣

1. 問題設定 2. 分析方法／対象 2.1 ミニコミの分析 2.2 テキストマイニングという手法 2.3 対象のグループ 3. 1970年代ウーマン・リブの台頭 3.1 既存の婦人運動への批判—求められる女性解放 3.2 リブの主張した「女性解放」 4. タイトルにみるリブと懇話会の問題関心 5. 1960年代から70年代の「女性解放」の変遷 5.1 抽象的な「女性解放」—1965-1969年(1-11号) 5.2 問い直される「女性解放」—1970-1974年(12-21号) 5.3 「女性解放」の進め方—1975-1980(24-30号) 6. リブへの共感と距離感 7. 結語

安全保障技術研究推進制度の助成を受けた研究者のネットワーク可視化 —KAKENデータベースを用いて— 鈴木 努

1. 構造探索のツールとしての計量分析
2. 科学研究と軍事研究
3. KAKEN データベースの利用
4. 共同研究者ネットワークの作成
5. ネットワーク構造による分類
6. おわりに

【東京都以外への社会への提言や活動の実績】

・新聞ジャーナリズムの衰退につれ、それを代替・補完する、新たな言論整理の手法と組織が必要である。同書 11-12 ページにおいて、研究代表者は「今後は・・・計読を、公共の諸課題をめぐる諸議論の布置関連状況を整理し、各々の主張に座標を与えて〈見える化〉するためにも使ってゆくべきだと考えている。公共の諸課題をめぐる諸議論がインターネットのカオスのなかで不動明滅するようになり、・・・せめてこのカオスを〈四角いジャングル〉程度には縮減し、噛み合う議論に向けて、発言を求めるすべての人をファシリテートする仕組みが必要だ。・・・本書・・・はその前哨である」と述べている。

【外部資金への応募状況】

・本計画の延長線上で、ソーシャルコンピューテーション研究会の会員たちと協力しながら近代日本の「国家」言論の計読研究をおこなっている。2021 年度科研費基盤 C に申請・採択された。

【科学研究費助成事業や国等の提案公募型研究費、企業からの受託研究費・共同研究費の獲得状況】

・同上。

【出版したことによる波及効果】

- ・ソーシャルコンピューテーション研究会に参加する意欲的な新入会員が、アカデミアの内外を問わず増えており、議論が活性化している。
- ・同時期に刊行された鳥海不二夫編『計算社会科学入門』（丸善 2021 年 1 月）、小峯敦編『テキストマイニングから読み解く経済学史』（ナカニシヤ出版、2021 年 2 月）の関係者と、互いに成果のエッセンスを学び合い、今後の発展について意見交換ができています。
- ・近い将来に研究会の第 2 アンソロジーの刊行が検討されている。